

視点

江戸の大津絵に惹かれた洋画家たち

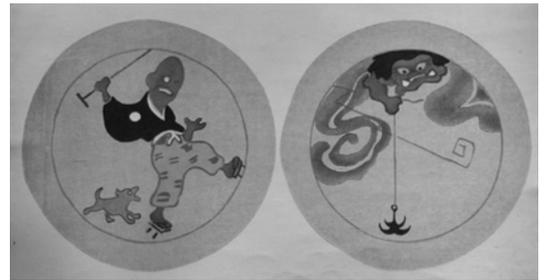
クリストフ・マルケ

(日仏会館・フランス日本
研究センター所長)

三月半ばに、六本木の泉屋博古館分館に小川千甕展をわくわくしながら見に行った。千甕は聖護院洋画研究所において浅井忠の晩年の弟子であり、学生の頃から気になってきた画家だが、これまで作品を全体的に見る機会には恵まれなかった。野地耕一郎館長によると、初めての回顧展と

仏画師出身でありながら、大正末期に洋画から南画に転じるという異例の道を歩んだ千甕だが、この展覧会でとりわけ興味を惹かれたのは、彼がフランスから帰国して間もなく手がけた手彩色版画の連作『西洋風俗大津絵』（一九一四年）である。漫画的で実に愉快な素材絵である。千甕は日本画、工芸デザインなどあらゆるジャンルの絵を試み、まさに「縦横無尽」に制作した画家である。なぜ江戸時代の代表的な民画である大津絵の独特の泥絵技法と筆致を、フランス、イタリア、オランダなどの様々な風俗に応用したのだろうと一瞬思ったが、展覧会の一角にその疑問を解く作品が展示されていた。彼の師匠である浅井忠がデザインした、ユーモラスな大津絵模様の漆器菓子皿と、千甕によるその図案の写しである。原始的な大津絵に興味を抱いたのは、ほかならぬ浅井忠の影響だった。

浅井は一九〇二年、フランス留学後に権威ある東京美術学校の教授職を辞し、工芸に挑戦するために京都に移って、大津絵の素朴なデザイン



浅井忠 大津絵図案『黙語図案集』芸州堂 1908年より

の素晴らしさにめざめた。古大津絵を熱心に蒐集し、弟子たちにもその魅力を伝えた。亡くなる直前には「此頃大津絵を手に入れしに無邪気なる画法今人の為し能はざる処に候」と、大津絵の意匠の面白さに対して礼讃する言葉を残している（俳人・水落露石への大津絵絵葉書、一九〇七年）。病床で描いた絶筆が大津絵の素描であることは意外に知られていない。民藝運動の柳宗悦たちが大津絵に注目する二十年以上も前のことである。

浅井忠の門下で大津絵に関心を寄せた洋画家は何人もいる。澤部清五郎もその一人で、浅井の没後に形見として譲り受けたと思われる江戸の大津絵「鬼の行水」が京都の画廊にあり、見せてもらったことがある。最近フランスで出版した、大津絵についての拙著『OSTJUE』（『日本の民画・大津絵』ピキエ社）に、この浅井旧蔵の絵を紹介した。雲にふんどしを掛けて据風呂に入ろうとしている赤鬼の滑稽な表現は浅井のお気に入りの画題だったようだ。

もう一人の浅井の弟子は、近代洋画の巨匠、ルノワールやピカソと交流した梅原龍三郎である。ヨーロッパの美術館に優れた日本美術品が少ないことを憂えていた梅原は、六〇年代にパリのギメ東洋美術館へ初期の大津絵「青面金剛」と「藤娘」を寄贈した。曾孫の嶋田華子さんに、大津絵と近代西洋画に触れた梅原の文章があることを最近教えていただいた（「大津絵に就て」一九一九年）。梅原にとって大津絵は「自分の為にはよく学ぶべき手本」であり、単純化されながらも力強く、無邪気で潑刺としているところが特に気に入っていた。「マチスの画に大津絵に似た味があるが及ばない」という言葉は印象的である。たしかに、簡素ながらもことに本質を捉える大津絵には、東洋的な油絵を追求した梅原の世界に通ずる精神がうかがえる。

大津絵の大胆な描き方の前に、フランスのモダンアートを連想し、自国の古い民画を新鮮な目で見直した画家は他にもいる。たとえば、明治末にパリから帰国した画家の中で大津絵を「まるでロダンだね」と言った人物がいた（水落露石『大津絵集』一九一二年）。また、七〇年代に「民画の至宝 大津絵展」や「江戸と明治の民族美術展」といったユニークな企画をした伝説の画商・羽黒河の木村東介も大津絵を「日本フォービズムの原点」とであると唱えた。

こうして、明治の浅井忠から、大正の岸田劉生、昭和の鳥海青児や岡本太郎まで、フランス美術に憧れた多くの洋画家たちが大津絵のプリミティブな表現に心打たれたり、学んだりしたことは、今や忘れさられているようだ。